

記憶の帰属と内容について

櫻木 新 (Shin Sakuragi)

芝浦工業大学

20 世紀の分析哲学における記憶概念の分析には”remember”などの記憶表現の用法に由来するいくつかの必要条件が前提されている。これらのいわば「伝統的」な記憶理論に対し、近年の記憶の哲学では、心理学における知見に沿った異なるアプローチが盛んに論じられている。本発表では特に「間違っただ」記憶の事例に焦点を当て、これらの二つのアプローチを比較・検討する。

1. 「間違っただ覚えている」

日本語においてはしばしば「間違っただ覚えている」とか「記憶違」 という表現が用いられる。日常的な直観に基づく限り、「間違っただ覚えている」とか「記憶違」もある種の記憶であろう。とすれば、適切な記憶理論はこれら「間違っただ」記憶を真正の記憶とする一方で、何らかの意味での「記憶違」を認める必要があるだろう。

2. 記憶の 3 条件

2-1. 把持条件

本発表で取り扱う記憶は心理学で言うところの宣言的記憶である。素朴な直観に従えば、これらの記憶は何らかの認知的な内容を有し、その機能はその認知的な内容をそもそもの獲得時点から把持することにあると考えられる。

この直観に沿って、伝統的な理論は認知内容（知覚経験、命題等）の把持を記憶の必要条件と見なす。古典的な例を挙げれば、ロックは記憶を観念の倉庫のようなものと考えた¹。この倉庫にしまわれた観念の内容が変質したり失われた場合が忘却であるが、そもそもの知覚とその想起は表象内容において同一であるとは考えがたい。とすれば記憶に求められる内容の把持は同一性ではなく、内容的な類似性などより緩い関係として性格づけられる。

2-2. 因果条件

他方において、適切な内容の把持だけでは記憶に十分ではない。完全に想像によって捏造された偽の知覚や命題内容が、たまたま過去の経験や信念と十分に類似していることはしばしば起こる。しかし素朴な直観に従う限り、この内容の類似によって、想像が想起経験になるわけではないように思われるからである。

把持条件において内容の側面から性格づけられた過去の認知状態と現在の想起の関係に、更に特定の因果的な条件を課すことで、想像やその他の偶然的類似から区別するというのが伝統的な理論の考え方である。記憶を可能にする因果関係はどのような

¹ J. Locke, *An Essay Concerning Human Understanding*, edited by R. Woolhouse, Penguin Books (1997), 147.

ものでも良いわけではないため、特定される種類によって様々な異なる記憶の因果説が区別できる。その代表例は Memory Trace 理論の嚆矢である Martin and Deutscher の”Remembering”である²。

2-3. 的確性条件

我々の日常的な記憶表現の用法に従えば、知覚にせよ命題にせよ、内容が完全に誤っている場合には真正の記憶として記述されないのが通常である。もちろん、偽なる信念や誤った知覚経験の「記憶」も記憶であるが、我々は「 $1+1=3$ を覚えている」とは言わず、「 $1+1=3$ という偽なる信念を覚えている」と表現するのが通常だろう。もちろん記憶内容がどのような意味において「正しい」のかの説明は理論によって異なり、ここではその様な「正しさ」の要求を内容の的確性と呼んでおくことにする。

3. 伝統的理論と生成説

伝統的な記憶理論は主にこれら把持、因果性、的確性の3点に訴えて宣言的記憶を性格づけようと試みる。しかしそのアプローチは必ずしも心理学上の知見と一致しない。そこで生成説は、特に把持条件と因果条件を疑問視し、的確性と他の条件に訴えることで宣言的記憶を性格づけようと試みる³。

確かに我々の記憶はそもそもの知覚や信念内容の正確なコピーとは限らないし、因果的な関係も一様に単純ではない。実際、我々は様々な理由から記憶現象を「間違っただ」ものと記述する。他方で、それらの「記憶違い」の事例の多くを我々はそれを捏造や単なる勘違いと片付けず、むしろある種の記憶現象と解釈する。

本発表では、伝統的な理論と生成説がそれぞれどのようにして様々な「間違っただ」記憶の事例を真正の記憶現象として捉えつつ、「間違い」を説明できるかを検討する⁴。

² C.B. Martin and Deutscher, M. “Remembering,” *Philosophical Review*: Vol. 75 (1966).

³ K. Michaelian, *Mental Time Travel: Episodic Memory and Our Knowledge of the Personal Past*, The MIT Press (2016).

⁴ K. Michaelian, “Confabulating, Misremembering, Relearning: The Simulation Theory of Memory and Unsuccessful Remembering,” *Frontiers in Psychology*: Vol. 7 (2016).